資 料

作井部門シンポジウム

「技術と工学のインテグレーション」

SYMPOSIUM

Integration of Technology and Engineering

開 会 の 挨拶*

世話人 ** 代表 浅 井 忠一郎 ***

Opening address by Chuichiro Asai

作井部門のシンポジウムにお越しいただきましたことを、これからシンポジウムを始めるにあたり、作井技術委員会を代表して御礼申し上げます。

プログラムを見ると随分難しそうな演題が並んでいて、本当にこれが井戸掘りのシンポジウムかと目を疑うほどです。まるでどこかの学会のようではありませんか。もとより石油技術協会は学会であって、作井もその学会のれっきとした一部門には違いありません。さはさりながら、正直申しまして作井というのは古くから学会と言う言葉には馴染みにくい何かがあったように思われるのであります。事実、作井部門から出せる論文が少なすぎることが一再ならず話題にのぼって、肩身の狭い思いをしたものでした。そこへゆきますと、今日のプログラムはこれまでとは打って変わってアカデミックで異色なものになりました。

さて、作井にはいささかアカデミックな今年のプ

ログラムを貫くテーマは「技術と工学のインテグレーション」です。副題が「新しい時代の掘削概念の創造に向けて」であります。

もちろんそういったことはこれまでも連綿と行われてきたわけです。しかし、今日それがますます必要になってきた。それも技術者と学者の単なる相互補完といった中途半端な形に留まらず、総合 (integration) が必須、多少極論すれば融合 (fusion) も、そうでもないことには今の窮地を脱する突破口が開けない、今日のテーマにはそんな意味合いが込められているようです。これは私個人の捉え方であって、各人各様の捉えかたがあってしかるべきだと思います。要するに、ことほどさように石油産業は今容易ならざる状況にあるということだと思います。

実は、私は最初のこのテーマが意味するところをもっと明確にしたうえで、しかるのちそれに沿ったシンポジウムを企画するのが委員長としての務めだと思いました。しかるに「そんなに四角四面に考えなくても良いのではないか」、「技術と工学の総合化、このいかようにもとれるテーマでとにかくやってみようではないか」、「テーマの意味するところが何なのかは、シンポジウムが終わった時点で自と見えてくるだろう」といったムードが支配的で、そういう中で企画がスタートしたわけです。

私もこう言いたいわば (演繹的でない) 帰納的なやりかたも面白いかなあ、というふうになんと傾いてきたわけです。そして事務局、委員・幹事諸君、講演者はじめ

* 平成12年 5 月24日、平成12年度石油技術協会春季講演会作井部門シンポジウム「技術と工学のインテグレーション」開会の挨拶 Opening address at the 2000 JAPT Drilling Technology Symposium entitled "Integration of Technology and Engineering", held in Niigata, Japan, May 24, 2000.

** 世話人：加藤 透 (出光オイル・ガス)、重松英一郎 (日本海洋掘削)、石田浩三 (日本海洋掘削)、栃川哲朗 (公団本部)、三品 哲 (帝石本社)、松澤三朗 (帝石本社)、今野 淳 (テルナイト)、中村 元 (石資本社)

*** 作井技術委員長 エスケイエンジニアリング(株) SK Engineering Co., Ltd.

皆様のご尽力でここに開催にこぎつけたわけです。

「技術と工学の総合化」、言ってみれば文武両道・知行合一を提唱する今日のシンポジウムの成否は、講演者の話がフロアの皆さにどれだけ理解されるかにかかってい

ると思います。得るところが多かった、新潟まで来た甲斐があったと言って帰途につける、そういうシンポジウムになることを期待して、開会の言葉とさせていただきます。